

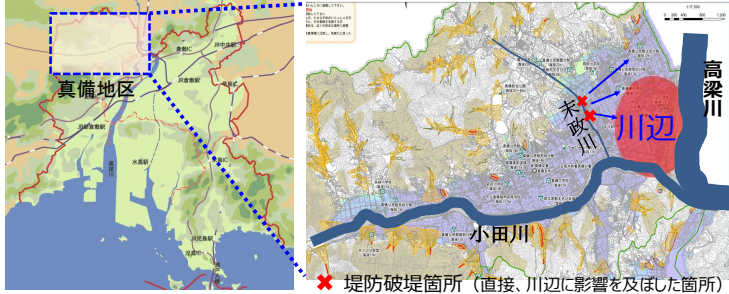
川辺の復興を願って！

岡山県倉敷市 / 川辺みらいミーティング実行委員会

I 川辺地区の地勢

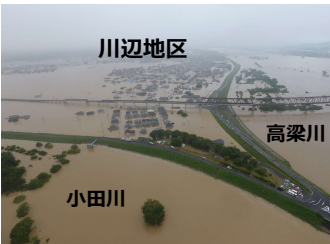
川辺地区は、倉敷市の西北部、旧真備町（平成18年に倉敷市と合併）に位置し、高梁川と小田川の合流部に接しており、江戸時代は山陽道の宿場町として発展し、昭和40年頃からは、水島工業地帯で働く者のベッドタウンとして、住居が増えました。

川辺地区は、過去何度も高梁川（支流の小田川を含む）の氾濫等による水害に見舞われた地域であり、明治以降だけでも、明治13年、明治19年、明治26年、昭和47年、昭和51年などに水害の記録が残されており、特に明治26年の水害は大きな被害となり、高梁川の大改修のきっかけとなりました。



II 平成30年7月豪雨災害

- 平成30年7月6日 夜**
川辺地区を含む真備地区全域に対し、市から相次いで洪水を警戒する「避難勧告」「避難指示（緊急）」が発令され、気象庁からは大雨特別警報が発表されました。
こうした中、市の**指定避難所や親戚宅等へ避難した住民も多数いました。**
- 平成30年7月7日 夜明け**
夜が白み始め、末政川の西側は浸水被害を受けたものの、末政川の東側（川辺地区）は大きな被害を受けていないことが分かってきました。
このため、避難所等へ逃げた住民のうち**自宅に帰還する者もいました。**
- 平成30年7月7日 朝**
朝6時30分頃、**末政川の堤防が決壊**（上右図）し、川辺地区も浸水が始まり、ほぼ全ての住居が2階まで浸水してしまいました。
東（高梁川）西（末政川）南（小田川）北（末政川）の全ての方向が水に囲まれ、住民は逃げ場を失い、自宅の2階の屋根の上などに這い上がって、救助を待つこととなった者が多数生じ、残念ながら亡くなられた方もおられます。
- 地域の崩壊**
川辺地区のほぼ全域が浸水し、被災住宅調査では**99%の住居が全壊**（床上1.8m以上の浸水）の判定を受けました。
こうした状況のため、大半の住民が川辺地区以外の仮設住宅へ移り住むほかなく、一旦、地域の繋がりが崩壊してしまいました。



平成30年7月7日 ドローン撮影
高梁川・小田川合流部から、川辺地区を撮影



平成30年7月8日
自宅の2階等に取り残され、自衛隊のボートに救助される住民



浸水した川辺小学校体育館



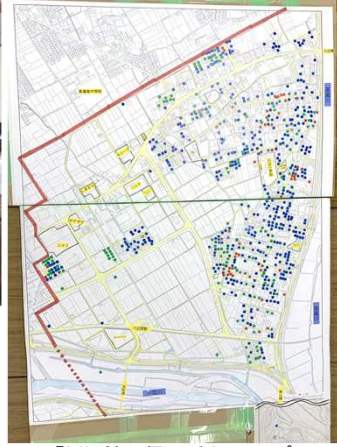
浸水した真備健康福祉プラザ

III 今、私たちができること

あまりの被害の大きさに、私たちは呆然となり、全てを失った悲しみのどん底にいました。しかしながら、全国から応援に駆けつけてくださったボランティアの方々、NPO団体等の支援などに励まされ、少しずつ川辺地区の住民が集い、復興への小さな一歩を歩み始めることになりました。



第2回 川辺みらいミーティング
令和元年6月9日



「川辺地区帰ってきた人マップ」

被災から1年を前に、また出水期を迎える前の時期を捉え「**行政に頼らず、今、私たちができることを考えよう！**」との趣旨で、有志が集まり、「**マイタイムライン**」について勉強をしました。

また、「川辺地区帰ってきた人マップ」の作成に取り組み、川辺の現状把握を行いました。

このマップは、既に川辺に帰って来た住居を青●、建築中の住居を緑●、川辺には帰らないと決められた住居に赤●のシールを貼り、川辺の現状を把握しました。

この段階（令和元年6月現在）では、約3割が川辺に帰ってきており、約1割が建設中（近日中に帰って来る）であることが判明した一方、約1割が「川辺には帰らない！」と決めていることが判りました。

IV 地区防災計画の策定を目指して



早めの避難スイッチを押すために（ワークショップ）



みんなのあの時を共有しよう・記録しよう

第3回 川辺みらいミーティング 令和2年1月19日



開催案内



みらいミーティングのメンバー

現段階での私たちの取り組みは、小さな一歩かもしれませんが。しかし、何時か「あの時の頑張りがあったから川辺が復興した。」と言えるように、そして子どもや孫たちに安心して住み続けられる川辺を創り、残していきたいと願い、「**地区防災計画**」の取り組みに挑戦することとしました。

第3回川辺みらいミーティングでは、講師として香川大学特命准教授 磯打干雅子先生をお招きし、「みんなで押そう！ 早めの避難スイッチ！」をテーマに、被災時の経験を振り返るとともに、避難した理由、避難しなかった（できなかった）理由などを話し合いました。